



にゅーすれたーふじやま・長泉

日本人三氏にノーベル物理学賞



2014. 10

パナソニックエイジフリー介護チェーン

暗い話題が続く中、10月7日、日本中が明るくなる嬉しいニュースが届きました。白い電球などに代わる新たな光源として、人々の生活を大きく変えた発光ダイオード(LED)、その実用化の扉をこじ開けた日本人(赤崎勇、天野浩、中村修二)のノーベル賞三氏同時受賞です。

発光ダイオードは1962年米国で発明されました。世界中の研究者が諦める中、日本の科学者の研究にこだわり続けた執念がこの快挙につながったと報道されていました。私の尊敬する「経営の神様」松下幸之助は「失敗の多くは、成功するまでにあきらめてしまうところに原因があるように思われる。最後の最後まであきらめてはいけないのである」「私は失敗するかもしれないけれどもやってみようというような事は決してしません。絶対に成功するのだということを確信してやるのです」と言っています。好きな言葉です。「どうだ、青が光ったぞ!」の瞬間に居合わせた人たちは最高の感動を共有できたことでしょう。羨ましいかぎりです。

中村氏は、「研究を始めた20年前にノーベル賞のことを考えていたか?」の質問に対し、「まったく考えていなかった。会社(日亜化学工業)に入ったときには赤色LEDだけを扱っていて、売り上げもよくなかった。会社の人には赤色LEDを推されていた。いつまでも売り上げがよくならなかったので怒った。会長(日亜化学創業者の小川信雄氏)に『青色ダイオードを作りたい』と言ったら『いいよ』とお金も出してくれた。海外に行ったこともなかったので『1年間留学したい』といったら、それも『いいよ』と。。。たった5秒の会話だった。米フロリダ州の大学に留学した。留学してわかったことは、米国では博士号が大事だということ。それがなければ、ただの実験助手。日本に戻ってきたときは博士号を取ることが夢だった。LEDが夢ではなかった」と笑ってその当時をふり返った。「米国には自由がある。アメリカン・ドリームを追いかけて一生懸命やればみんなチャンスがある。怒りがすべてのモチベーションだった。怒りがなければ何も成し遂げられなかった」とも述べている。受賞者達が、「ノーベル賞を取りたいと思って研究を続けてきたわけではなく、“人の役に立ちたい”と思い続けて20年30年40年「LEDの実用化で世の中の役に立ったことが誇りです」と口々に述べていたのが印象的でした。



ノーベル賞受賞のニュースは、子どもたちに夢と目標を与え、若い研究者を鼓舞する絶大な力があると思います。日本が第二次世界大戦で建国以来の敗戦に打ちひしがれていた時、湯川秀樹博士のノーベル賞受賞に国中がパアッと明るくなり復興に力を得た事実があります。赤崎氏は20歳でそのことを聞いたそうです。人はいくつになっても目標を持つことが大切です。目標を持つと持たないとでは人生に大きな差が出てくるような気がします。私の息子も大学を卒業してサラリーマンを6年間経験しましたが、今はアメリカン・ドリームを求めて渡米し、米国の大学に通っています。私も社内ではPDCAということをしきりに意識させられているせいか残り少ない人生ですが目標を持って一年一年充実した人生を送るように努力しています



赤い羽根共同募金 この募金は昭和22年に国民たすけあい運動として始まり、今年で68年目を迎えます。今年も10月1日より全国一斉に展開されています。私も10月1日街頭募金に立ちました。地域における高齢者の居場所づくり、障がい者の就労を支援する作業用の設備整備、子育て支援等に役だっています。

渡邊啓視